「平成と私」特集

原田義則（3 組）

平成雑感

このエッセイを書いているのは平成 31 年 3 月 31 日である。明朝 11 時 30 分に新しい元号が発表されることになっている。私は「へいせい」と言う音が嫌いだった。 口唇が一度も緊張することが無く、ずっと開きっ放しで締まりのない音の羅列であることがその理由だった。 仕事上も中央官庁向けの報告書などの公式文書以外は殆ど西暦を使用していて元号に思い入れはない。

時代の評価は後の時代で決まるのだろうが、平成時代には日本が直接巻き込まれる戦争は無かったものの、バブル崩壊から「失われた 10 年」、「就職氷河期」へと続く不況とその後にダラダラと続く景気回復、更にはサリン事件、阪神淡路大震災、東日本大震災、日常化した「異常気象」による自然災害が多発したこの時代は「何とも冴えない時代」だったと評価されるのではないか。

とは言え、1989 年 1 月 8 日に始まり 2019 年 4 月 30 日に終了するこの時代は我々の世代にとっては働き盛りの時代であった。 個人的には 1982 年、33 歳の時に大学から民間企業に就職し、平成の始まった 1989 年には主宰する研究グループ（課）を立ち上げ、自らの裁量で社内で全く新規な研究テーマを選択し推進すると共に、それを可能とするため社内外からの研究資金の獲得に邁進する日々だった。 当初はバブル崩壊前だったこともあり、賞与はどんどん上がり、40 歳そこそこの主任研究員（課長）の賞与が東大の総長の賞与を凌ぐのではないかと言う勢いだった。 所属することになった新しい研究所の開設に合わせた装置購入に何億円もの予算を投じることが出来たが、直ぐに日本経済と社業の停滞に会わせるように研究テーマの設定も研究資金も世知辛くなって行った。

電電公社の民営化で政府が得た資金で大阪に設立した半官半民の研究所で全く制約のない研究をさせて貰ったり、それまでの知識と経験と研究ファシリティーを武器に知的財産を製品とする「研究開発代行ビジネス」と言う全く新しい事業を仲間と共に社内で立ち上げたり（企業内起業）して結構楽しませて貰った（これは 2000 年にユニクロやプレイステーション 2 と共に「日経優秀製品・サービス賞」を受賞）。

58 歳になった 2007 年には再び大学に戻り、企業で 25 年間培ったスキルを活かす教員ポジションに就き、それまで殆ど興味になかった教育にも携わる様になったが、「ゆとり教育」で育って来た学生達のがむしゃらさの無さには苦労した。

とここまで書いて来て思うのは、「平成には未練は無いが、結構楽しませて貰った」と言う満足感と、「一つの時代が終わって仕舞う」と言う一抹の寂しさを感じている自分がいることに気付き、驚いた。　　（平成 31 年 3 月 31 日　記）　次ページに著者近影

2019 年 2 月の同期新年会にて 3 組の同級生と。
左から沓掛文夫、著者、澤崎健一、柳沢光美